

氏名	阿 曾 步
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	甲 第 2 1 5 号
学位授与年月日	2 0 2 0 年 3 月 2 4 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
学位論文題目	大槻平泉の研究 経世論と養賢堂学制改革 ( A Study of Ōtsuki Heisen: His Political Theory and the Educational Reform of Yōkendō )
論文審査委員	主 査 特任教授 小 島 康 敬 副 査 上級准教授 ロバート エスキルドセン 副 査 教 授 菊 池 秀 明

---

## 論文内容の要旨

大槻平泉の経世論および養賢堂の学制改革に着目し、その思想的背景について考察した。平泉は全国的な知名度はほとんどない人物である。しかし、彼が仙台藩藩校養賢堂の学頭であった期間、藩校には全国的にも早い段階で蘭学が導入され、また彼の息子が学頭を務めた時期には、国内で唯一藩校にロシア学が導入されるなど、平泉が注目に値する人物であることは間違いない。本研究では大槻平泉を主題に、これまで顧みられることのなかった彼の経世を考察の対象とした。

第一章では、まず大槻家の由緒および大槻家の人々について整理した。大槻家は代々大肝入を務める家であった。また、仙台の大槻家から分家した江戸の大槻家の人々は、玄沢をはじめ、磐溪、文彦、如電と学者の一族でもあった。こうした環境下で生まれ育った平泉もまた早くから学問を志し、仙台の志村東嶼のもとで学んだのち、江戸へ登り、林述斎の門に入った。時はまさに寛政の改革期にあたり、林家の私塾である聖堂は、学制改革を経て幕府直轄の昌平坂学問所となった。この一連の改革を間近で見ていた経験が、後に養賢堂の学制改革にも繋がっていくこととなる。新体制となった昌平坂学問所には、寛政の三博士と呼ばれる指導陣が揃い、平泉は恵まれた時を過ごした。中でも古

賀精里との関係は注目に値する。彼が編纂したとされる『大学』関連の書物は、ほとんど平泉が執筆したものであるといわれているためである。昌平坂学問所で学問に励むなか、さらに知見を広めるために、平泉は遊歴の旅に出ることを決意する。始めに 60 日間、次に約 3 年間の旅に出た。様々なものを見、各地の知識人との交流を通して、平泉は幅広い知見を得た。遊歴後は仙台藩に戻り、養賢堂の学頭に任じられる。平泉は 19 世紀前半という対外関係が目まぐるしく変化してゆく時代に、各種の学制改革を行いながら、約 40 年にわたって学頭を勤め上げたのであった。

第二章では、まず経世論とは何かという課題について整理し、次に平泉の著作『経世体要』に基づき、平泉の経世論を「内憂」と「外患」に二分して考察した。

平泉が考えていた「内憂」は、学者らが自国を蔑む風潮であった。彼らは中国やオランダに陶醉して日本を卑下し、中には自国を「夷狄」と呼ぶ者さえいる。こうした状況が続けば、いつか大害が起こると考えた平泉は、学者は「皇国」の「国体」を講究すべきことを説いた。国の恒久的な繁栄は、「皇統」なしにはあり得ないと考えていたからである。そして、それを補佐するものとして、儒学を学ぶべきことを説いたのであった。

一方、平泉が憂慮した「外患」とは、長崎でロシア勢力を目撃したことに端を発するものであった。平泉が長崎を訪れたのは、レザノフが通商を求めて来航したのと同時期であった。レザノフが送還した漂流民の津太夫が仙台藩出身であったこともあってか、平泉はレザノフの動向に強い関心を持っていた。後に『経世体要』のなかで、レザノフ一行に対する幕府や長崎奉行の対応について、どのような誤りがあったのかを分析している。そして、こうした誤りを発端として、いつかロシアが「謀事」によって日本を陥れる事態になることを恐れた。いつか「外患」がやってくるという危機感を抱いた平泉は、「外患」に対抗すべく、「制度」を立てることを構想した。平泉は海防の備えを説き、これまでのような一国一城の守りではなく、日本全体として海防体制を整えるべきことを主張した。さらに、海防体制を強固なものとするためには、オランダ語を学び、西洋式の要塞の作り方を知ることや西洋式の戦艦を作るべきことを述べる。このように、平泉が蘭学を取り入れていく背景には、海外勢力に対する強い危機意識があった。

第三章では、まず仙台藩の藩校の沿革について整理し、次に仙台藩を代表する二人の知識人、芦東山と林子平の学校論についてまとめた。その上で、平泉が行った学制改革について、彼の「上書」や「意見書」をもとに、平泉がどういった意図で学制改革を行

おうとしていたのかを考察した。平泉は養賢堂を「御用」に立つ人材育成の場と考えた。そのために、「異学」ではなく、「正学」を学ぶべきことを主張した。また、武士の学問は、「家業人」の学問とは異なることを述べる。当時一般的であった講釈や輪講といった教育方法では、弁舌の巧みさが養われるだけである。そうした口先の技法でごまかすことなく、出仕後に「御用」に立つことを常に想定しながら、見せかけでない学力を身につけるべきことを平泉は説いたのであった。

第四章では、平泉が行った学制改革の結果として、仙台藩にどのような蘭学が興ったのかを明らかにするため、養賢堂で使用されていたと考えられるオランダ語史料に着目し、養賢堂における蘭学修得の実践例を考察した。

オランダ語史料の一つは「養賢堂蘭学写本」である。これらは版心に「養賢堂」と書かれた横罫線の用箋が閉じられた8冊の帳面である。オランダ語の文章が筆写され、その傍らに日本語訳が書かれている。オランダ語の文章を分析した結果、主に蘭学者の間に流通していた百科事典や学芸辞典、科学や化学に関する蘭書から引用したものであることがわかった。また、和訳部分を詳しく分析すると、当時の蘭日辞典『訳鍵』を用いて翻訳に挑んでいたことも明らかになった。さらに、翻訳の有り様を見ると、これらは大槻玄沢が後に「旧法」と自称することとなる、逐語訳的な手法が取られていた。すなわち、オランダ語文法を介した翻訳方法にはまだ至らなかったのである。

もう一つのオランダ語史料である「蘭文旧約聖書ダニエル書」は、名前の通り、旧約聖書のダニエル書の内容が書かれた一冊の帳面である。本章では、その翻刻を行い、さらに内容について考察した。その結果、旧約聖書自体の内容を写したものではなく、百科事典の DANIEL の項目を転写したものであった。また、頭注などに書かれた和訳には、旧約聖書で述べられる神の奇跡に関する記述が削除されているという特徴が見られた。本史料からは、近世後期に百科事典を通してキリスト教を知ろうと試みたことが窺える。本研究では、大槻平泉を中心に、彼の経世論および学制改革、その成果としての養賢堂における蘭書翻訳の実態について考察してきた。平泉は、遊歴中にレザノフの一件を目撃したことで、対外的危機感を強く抱き、それが「御用」に立つ人材育成の方針に繋がった。こうした方針のもと、平泉による学制改革後の藩校では、より実学的な側面が強化されたと言える。それゆえ、桜田虎門に批判される訳であるが、しかし一方で、蘭学・ロシア学の発展、幕末には西洋軍艦開成丸の建造など、全国的にも優れた功績を残す結

果となったのであった。

## 論文審査結果の要旨

審査は2020年1月17日、定刻通り13時15分から15時まで教育研究棟247において公開のもと実施された。

審査では冒頭主査から、提出論文についての内容を簡潔に要約し、中間発表において指摘された点をどのように反映させたかにも言及することが求められた。それを受けて阿曾氏からは予め準備されたレジメの提示があり、それをもとに論文の概要が丁寧に説明された。その後、各審査委員から概ね以下のような感想、コメント、質問が出され、応答が活発に行われた。

- ・封建・郡県論と代官制との関係性はいかなるものか。
- ・日本は周囲が海に囲まれているにもかかわらず、なぜ軍艦建造を軽視したのか。そのような中で平泉の海防意識はどのような特異性を有していたのか。
- ・基本的に読みやすく、読んでいて「ワクワク」とした。
- ・『経世体要』で展開されている経世論と養賢堂学制改革論とが各々独立的に扱われている感があるが、両者は当然に連関しているはずであり、その連関性を明確にすべきである。
- ・新資料を用いての養賢堂での蘭書翻訳作業の実態についての詳細な紹介と考察は未開拓の分野であり、大変興味深い。
- ・本論では平泉が捕鯨を見学した史料（『鯨史稿』）が紹介されているが、このことの意義をどのように考えるべきなのか。捕鯨への関心が彼の構想する海防策においてどのように反映されているのか。
- ・書き出しを大槻家の遺誡から始めたのはセンスがとても良い。平泉の学問・思想の達成を彼個人に帰するだけでなく、「家学」としての知の継承にあったことを印象付けるのに極めて効果的であった。家学としての知の継承は、林家、伊藤仁斎、荻生徂徠、本居宣長、佐藤信淵、平田篤胤、幕府の儒官古賀家等々にも見られ、「家

学」の伝統という視野の中で大槻家の学問を捉え直すことの意義を更に強調すると、説得力が増し、「家」を媒体とした江戸の学問的知の継承といった新たな主題が浮かび上がってくるのではないか。

・芦東山と林子平の学校論が取り上げられているが、平泉の学校論との違いがはっきりしない。なぜこの節を設けたのか、もう少し連環づけるべきではなかったのか。

・仙台藩には崎門系朱子学と林家及び木門系朱子学との伝統的確執があり、平泉（林家）と桜田虎門（崎門）との確執にまで踏み込んで考察すると、平泉の目差す学制改革の意義がさらに闡明になり、同時に両者の学制をめぐる問題点が浮かび上がってくるのではないか。

・平泉と水戸学との思想的影響関係、とりわけ「国体」論や海防論をめぐる言説の前後関係はどうなのか。

・最後に設けられた「大学語脈解」の扱いが不十分である。平泉の『大学』解釈と経世論との有機的関連性を読み取ることができるのではないか。また「語脈」という用語に込められた平泉の意図とオランダ語翻訳との連環の可能性はどうなのか。

これらの質問に対して阿曾氏は丁寧に回答した。質問の全てに明解な回答が得られたわけではないが、応答の中に今後更に改善・追究してゆくべき課題の方向性の発見があり、建設的な対話がなされた。

上記のような審査を経て慎重に検討した結果、提出論文はそれぞれの章の論理的有機的な連環付けをより明確にすべき点、ボリューム的にやや物足り点、折角の着眼点の良さがまだ十分に生かしきれていない点等々、改善・発展すべき余地を残すが、これまで研究史において穴のあった大槻平泉を本格的に取り上げた点、新資料を駆使しての蘭書翻訳の具体的事例の紹介し、仙台藩における蘭学受容の実態を詳細に解明した点、これまで西南日本を中心に論じられてきた蘭学史に東北という地域からの視座を取り入れた点を高く評価し、審査委員会は学位請求論文が博士の学位授与にふさわしいものであるとの結論に至った。